

CDEJ

Certified Diabetes Educator of Japan

25th anniversary



理事長メッセージ

新しい時代の扉を開く CDEJ（日本糖尿病療養指導士）

2025年2月、日本糖尿病療養指導士認定機構は、設立25周年を迎えます。この間、脈々と本機構の理念は継承され、着実に発展してまいりました。この大きな節目にあたり、本機構の歴史と伝統を尊重し、その社会的使命を全うするため、意欲あるCDEJと共に一層精進する所存であります。

さて、2000年に設立された本機構は、その翌年より日本糖尿病療養指導士（CDEJ）の認定を開始し、現在の認定者数は全国で約1万7千名に達しています。認定開始以降、CDEJの活躍には目を見張るものがあり、今やその存在なしでは、高度・良質な糖尿病診療の提供は不可能と言っても過言ではありません。また、活動の場は病院・クリニック内に留まらず、地域医療、健康啓発など多岐に及んでおり、我が国における糖尿病医療のあらゆる領域で、リーダーシップを発揮しています。

その半面で、新たな課題にも直面しています。糖尿病を取り巻く医療環境は、設立当時とは大きく様変わりしました。我が国の医療は、地域包括的なチーム医療の構築へと軸足を変えつつあります。糖尿病はその代表的な対象疾患にあげられますが、患者さんの高齢化および生

活習慣や病態の多様化に伴い、療養指導には患者の属性を踏まえた個別化が求められています。薬物療法の進歩は多くの選択肢をもたらしましたが、糖尿病の予防と管理の基本に生活習慣の適正化があることに変わりはありません。真の個別化を実践するためには、質の高い医療技術はもとより、個々の患者のニーズを把握する確かな見識と、それに基づく多職種の有機的な連携が必要です。この中で、新しい時代の扉を開くCDEJが果たすべき役割は一層大きくなる一方、その資質は常に問われることになるでしょう。

本機構はこれからも多彩な社会の要請に応えるべく、各職種のCDEJがキャリアを積むプロセスを支援し、その達成度を正しく評価し、次代を担うCDEJを世に送り出す覚悟であります。

25年目を迎えたCDEJ認定機構は、時代の変化を踏まえ、親学会である「日本糖尿病学会」「日本糖尿病教育・看護学会」「日本病態栄養学会」とともに、そのブランドに相応しい技能を備えたCDEJの育成を目指して、これからも専心努力してまいります。

一般社団法人日本糖尿病療養指導士認定機構

理事長 宇都宮一典

医療法人慈生会野村病院
東京慈恵会医科大学名誉教授



CDEJ（日本糖尿病療養指導士）とは

CDEJ: Certified Diabetes Educator of Japan

CDEJ（日本糖尿病療養指導士）とは、糖尿病治療にもっとも大切な自己管理（療養）を患者に指導する医療スタッフです。

高度でかつ幅広い専門知識をもち、患者の糖尿病セルフケアを支援します。

この資格は、一定の経験を有し試験に合格した看護師、管理栄養士、薬剤師、臨床検査技師、理学療法士に与えられ、2001年3月に第1回認定試験が行われました。CDEJに認定されることは、糖尿病の臨床における生活指導のエキスパートであることを意味します。

糖尿病患者の療養指導は糖尿病の治療そのものである

とする立場から、患者に対する療養指導業務は、わが国の医療法制のもとでそれぞれの医療職の業務に則って行われます。

米国、カナダ、オーストラリアなどでは1970年代の初頭より、糖尿病療養指導従事者の専門性と認定について検討され、1986年には資格としてCDE（Certified Diabetes Educator）制度が発足し、実績を積んでいます。

医療は日々進歩しますので、CDEJとして認定された後も引き続き実践と研鑽を重ねて最新の知識・技能を身につける必要があります。このため、CDEJの認定制度は5年毎の更新制となっています。



チーム医療の キーパーソンとして CDEJ 看護師の役割と展望



看護師 瀬戸奈津子

一般社団法人日本糖尿病教育・看護学会理事長
(関西医科大学看護学部・看護学研究科)

2020年より続いたコロナ禍による糖尿病患者の受診控えや病棟の再編成などにより、CDEJ看護師の皆様には看護実践の機会の減少、糖尿病療養指導を後回しにせざるを得ない葛藤があったのではないのでしょうか。『チーム医療の推進に関する検討会報告書』（厚生労働省、平成22年3月19日）の基本方針に「看護師について、あらゆる医療現場において、診察・治療等に関連する業務から患者の療養生活の支援に至るまで幅広い業務を担いいうることから、いわば“チーム医療のキーパーソン”として患者や医師その他の医療スタッフから寄せられる期待は大きい」と記載されています。

2012（平成24）年度診療報酬改定で評価された糖尿病透析予防指導管理料においても、「透析予防診療チーム」が必須とされました。一方で医療法施行規則における外来看護職配置基準の「患者30名につき看護職1名」は1948（昭和23）年から変わっておらず、依然としてCDEJ看護師を外来に配置してもらえない状況が続いています。医師の働き方改革の対策である「タスクシフト/シェアの推進」観点からも、看護部門長ひいては施設長に対し、CDEJ看護師によるチーム医療のキーパーソンとしての役割を示せるような努力が求められています。

糖尿病のある高齢者がますます増加することから「地域包括ケアシステム」の整備においても、CDEJ看護師には、地域、在宅の場でのシームレスな活躍が期待されます。糖尿病のある高齢者介護との連携や多職種連携はもとより、病院と訪問看護ステーションなどの在宅をつなぐ看看連携においても、CDEJ看護師がチーム医療のキーパーソンとして果たせる役割は大きいのではないのでしょうか。そのためにも新たにCDEJ看護師を目指す方々が増えるように、糖尿病療養指導の魅力や醍醐味を後進へと伝えるべくベストを尽くしてまいります。

CDEJ として歩んだ 25 年

管理栄養士 高橋徳江

(順天堂大学医学部附属浦安病院栄養科)



CDEJ が発足誕生してはや 25 年。私が CDEJ として歩んだ年月と重なります。

私のかげがいえない宝物は、たくさんの患者さんとの出会いです。患者さんから多くのことを学び、成長できたことが私の唯一の自慢です。

ちょうど今から 20 年前のことです。外来受診の際に必ず栄養相談に来てくださっていた患者さんが脳梗塞で倒れ、救急病棟に運ばれて来ました。血糖マネジメントが不十分であったことを自覚していた患者さんは「お菓자에注意するように何度も言われていたのに、守ることができずにごめんなさいね。」との言葉を残して、車椅子姿のままリハビリのために転院をされました。私にとっても、患者さんにとってもショックな出来事でした。それから半年が経ったみぞれが雪に変わるような寒い冬の日、JADEC（日本糖尿病協会）主催の生活習慣予防週間の講演会があり、私はその時の演者の一人に選ばれていました。当日、なんと杖をついたその患者さんと会場で再会をすることができたのです。患者さんは「やっと車椅子卒業です。リハビリ病院から退院し、今日初めて一人で外出したんですよ。先生に会いたくて…」と話しかけてくれました。私はその言葉と姿に目頭が熱くなりました。二人で涙を流して、喜びを分かち合ったことを今でも昨日のように覚えています。同じことを繰り返さないように、これからも一緒に二人三脚で進んで行こうと誓った日でした。

患者さん一人ひとりの想いや患者さんの望むゴールをしっかり把握して、これからも療養指導に励んで行きたいと思っています。

CDEJ は、患者さんのために役立つ、やりがいのある資格です。

CDEJ の皆さん、気持ちを一つにしてこれからも一緒に歩んでいきましょう。

CDEJ の資格を持つ管理栄養士の方が増えて、患者さんをサポートする輪が大きくなることを心から願っています。

CDEJ 制度が薬剤師に与えた 影響と展望



薬剤師 朝倉俊成

一般社団法人日本くすりと糖尿病学会 理事長
(新潟薬科大学薬学部)

日本糖尿病療養指導士認定機構設立 25 周年を迎えられたこと、心よりお祝い申し上げます。この 25 年にわたり、認定機構は糖尿病医療の質向上と多職種連携の推進において重要な役割を果たしてきました。私は、日本糖尿病療養指導士（CDEJ）認定機構発足時から理事や全ての委員会に携わり、CDEJ の発展を見守ってまいりました。CDEJ は糖尿病をもつ患者さんへの質の高い療養支援を可能にし、医療チーム内での薬剤師の役割を拡充し、私自身の成長にも大きな影響を与えてくれました。

薬剤師として糖尿病治療に携わる中で、CDEJ 制度が医療者にとって重要な指針であることを強く実感しております。従来、薬剤師の役割は薬の提供や服薬指導が中心でしたが、CDEJ 資格の普及により、糖尿病ケアへの積極的な関与が可能となり、他（多）職種との質の高い連携も実現しました。現在、薬剤師は服薬指導や副作用管理、低血糖予防策の提案、災害時対応といった専門的支援に加え、自己注射療法の手技指導や生活習慣改善の助言も行い、患者が安心して自己管理を続けられるよう支援しています。

さらに近年は、新しい治療薬やデバイスの登場により糖尿病薬物療法がますます複雑化しており、患者さんごとに最適な治療を実践し、効果的にモニタリングを行うことがますます重要となっています。CDEJ としての知識と経験を活かし、医師をはじめとする医療スタッフと協力しながら、個別化医療の実現に貢献できることは、私たち薬剤師にとって大きなやりがいです。

今後も、認定機構が CDEJ の育成と多職種連携の推進においてリーダーシップを発揮されることを心より期待しております。私自身も、CDEJ の一員として、糖尿病をもつ患者さんがより良い生活を送れるよう努力を続けてまいります。

臨床検査技師の 専門性を活かした 療養支援と未来に向け



臨床検査技師 中川裕美
(倉敷中央病院リバーサイド)

日本糖尿病療養指導士認定機構が設立から25周年を迎えるにあたり、心からお祝いを申し上げます。そして私たちが療養支援を充実させるために、多大なご支援を賜っている先生方や認定機構の方々に深く感謝申し上げます。この節目を祝うとともに、臨床検査技師による専門性を活かした療養支援を振り返り、未来への展望を考えてみたいと思います。

25年前当時、臨床検査ではより早くより正確に検査結果を返すことに力を入れていました。最近ではそれにとどまらず、検査結果を患者さんに説明できる力も求められています。その中で、CDEJは検査結果を伝えるだけでなく患者さんに寄り添うスキルに長けているということで、「臨床検査技師による療養支援」のリーダー的存在になっています。糖尿病治療においては、薬物療法や食事・運動療法など多岐にわたるアプローチが求められます。臨床検査技師は他の職種のような直接的なケアを行うことは少ないですが、検査結果に基づいた支援を行うことを得意としており、患者さんとともに検査結果から病態を振り返り、他の職種と連携をとりながら行動変容につなげています。また、検査結果の不明点・矛盾点などの分析も行うことで、治療への信頼感や心理的な安心感を支えることができていると思っています。

これから地域連携や医療DXが一層進んでいくと思われます。臨床検査技師ならではの技術的スキルで在宅や病院などさまざまな場面で使用される機器の性能を理解し、地域で検査結果を共有できるよう検査の質を確保していく必要があります。そして多職種で連携をとりながら、地域で「橋渡し」を行いつつ、患者さん一人ひとりに応じた支援ができるよう努力していきたいと思っています。今後、日本糖尿病療養指導士認定機構がますます発展し、職種や地域を超えたつながりがさらに広がり、指導士にも患者さんにも頼れる存在であり続けることを心より願っています。

理学療法士からみた CDEJの役割と展望、 未来に向けて



理学療法士 井垣 誠

(公立豊岡病院リハビリテーション技術科)

日本糖尿病療養指導士認定機構が設立 25 周年を迎えるにあたり、理学療法士 CDEJ の役割と今後の展望について概括いたします。私自身も第 1 回認定試験に合格して以後、臨床現場で CDEJ として途切れることなく活動を行ってきました。当初から糖尿病患者にとって運動療法は重要であると認知されていたものの、理学療法士として科学性を追求するばかりに、簡単なことを難しく表現していた経緯があるように思います。私が認定機構の委員に就任した 2008 年頃、他職種委員から「糖尿病療養指導ガイドブック」の内容が理解しづらく運動療法指導は難しいという話を聞いたことを思い出します。そして患者さんも運動療法を実践するには、ある程度の身体機能や病態の安定が求められ、運動療法の「敷居」は高かった状況でした。しかしその後、患者さんの高齢化や運動・身体活動に関するエビデンスの集積、合併症管理における理学療法士の役割が示されるようになってくると、しだいに運動療法の「敷居」は低くなってきたように感じます。現在は計画的に行うウォーキングなどの狭義の運動療法に留まらず、生活活動の増加や座位時間の短縮、高齢者向けのレジスタンス運動やバランス運動の指導も重要視されています。血糖マネジメントに対する関わりだけでなく、患者さんの日常生活全体を踏まえた介入が求められています。

近年、薬物療法や持続血糖測定器の進歩は目覚ましく、これらが安全な運動療法指導の提供に繋がっていることに間違いはありません。他職種と連携し、糖尿病治療の進歩に合わせた運動療法のあり方を追求していく必要があります。また糖尿病性腎症における透析予防や糖尿病足病変におけるフットケアのチーム医療に理学療法士は十分対応できているとはいえません。両者はともに患者さんの QOL に大きく影響するものであり、理学療法士の存在をアピールしていきたいところです。今後、ますます糖尿病治療において理学療法士の関わりが定着していくことを期待しています。

自信と自覚を持って 仕事をしましょう

現在、院内には CDEJ を取得した看護師、管理栄養士、理学療法士、臨床検査技師が糖尿病患者さんの入院に関わっていますが、CDEJ の資格を有することで「自分は糖尿病に関するプロフェッショナルである」という自覚を持って生き生きと仕事をしているように感じます。

また、院外でも彼（彼女）らは北九州地区の様々な糖尿病行事や新たな北九州 CDE の育成にも関わり、地域との繋がりも大事にしています。

2025 年には週 1 回のインスリンが日本で発売さ

医師 中村宇大

(製鉄記念八幡病院)



れますが、患者さんに安全に安心して使用いただくためにも CDEJ の役割は大きいと思

います。この先も新たな薬剤やデバイスが次々に登場すると思いますが、CDEJ の自覚と誇りをもって成長を続けてください。

なお、私が勤務する病院では、教育入院 36 周年を記念し、教育入院担当の CDEJ/CDE でお揃いのバッグを制作しました。

医師の声 Voices from Doctor

医師にとって「気持ちを一つにした」 CDEJ の存在は心強い存在です

医師 税所芳史

(さいしょ糖尿病クリニック)



25 年前は私はまだ研修医で、糖尿病医としての私の医師人生は常に周囲の CDEJ の方々に支えられてきたように思います。

現在、糖尿病の診療には「患者さん中心の医療」が求められています。第 4 次「対糖尿病戦略 5 ヶ年計画」においても「1,000 万通りの個別化医療」が提唱されており、いかにひとりひとりの患者さんに寄り添って医療を行っていくかがとても重要になっています。ひとりひとりの患者さんに向き合い、最適な解決策を考えるためには、医師一人の力だけでは到底行えません。患者さんを中心に、多職種がそれぞれの専門的な視点からさまざまな知恵を出し合うことで、はじめて患者さんにとってよりよい医療を提供

することができます。また多職種のスタッフが気持ちを一つにしてひとりの患者さんに接することは、患者さんの安心感にもつながり心理面での大きなサポートになっています。そのような安心感は、患者さんの QOL を高め、治療の継続にもつながります。CDEJ はこれまでこの「気持ちを一つにした」医療スタッフの育成に大きな役割を果たしてきました。25 年を経た現在、多くの CDEJ の方々が全国の医療現場で活躍されており、糖尿病診療にあたる医師にとっても「気持ちを一つにした」同志 CDEJ の存在はなにより心強い存在となっています。

CDEJ の力は糖尿病診療に不可欠な要素です。今後も多くの CDEJ が誕生し、ひとりでも多くの患者さんの幸せのために、ますます医療現場を盛り上げてくれることを期待しています。

[CDEJ インタビュー]

糖尿病をもつかたに、 いつも教えて頂いています



看護師
肥後直子

京都市立医科大学附属病院
看護部

CDEJ 更新 4 回

CDEJ
Certified Diabetes Educator of Japan
25th anniversary



「国立京都国際会館」にて

大阪 出身の私にとって、はじめは隔たりを感じる京都でしたが、今では大好きなところになりました。

特に京都の四季は全てが美しく、雪の大文字、鴨川の桜、御所の銀杏には心が奪われてしまいます。

今では病院勤務も 40 年となり、時には町家で美味しいイタリアンを楽しんだり、普段は評判のラーメン屋を探したり。やはり一番癒されるのは、母の手作りハンバーグ。

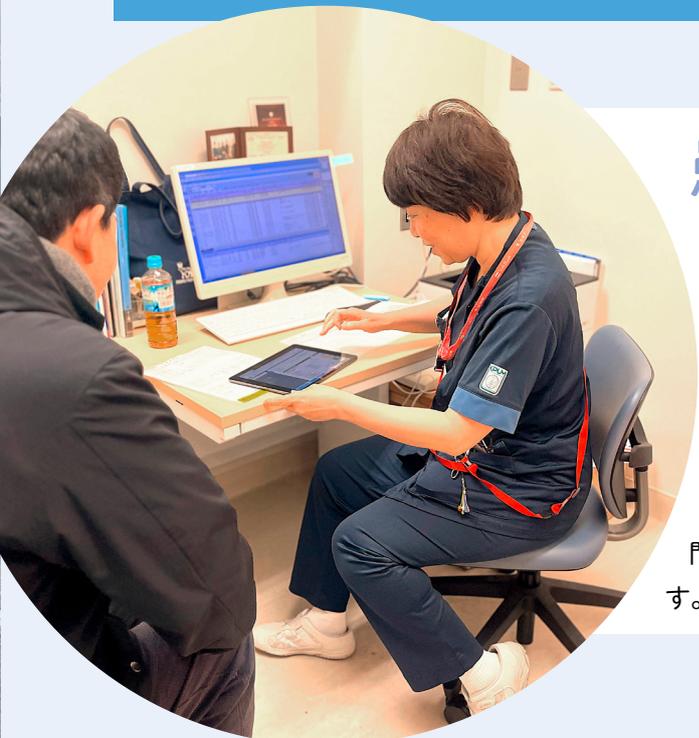
でも未だ納豆は苦手。

趣味はとにかく小説を読むこと。特に村上春樹の作品は大好き。初期の作品は繰り返し読み返しています。

CDEJ の資格を取得するきっかけは、糖尿病看護認定看護師の資格を取得してから。

もっと糖尿病を学びたく、糖尿病療養指導士に挑戦してみました。CDEJの魅力は、異なる職種であっても、全く同じ糖尿病療養指導士の資格を取得できるところ。

資格の有無に関わらず、皆糖尿病を持つ人にみんな向き合っているわけですが、CDEJ同志は、ベースの知識が一緒という無意識であっても強い連帯感があると思います。



患者さんに対し、この人は、何を言いたいのか、何を願っているのかを考えながら真摯に聴くことが私の基本です。患者さんのお気持ちに寄り添い、一生懸命聴くことはとても難しいと今でも思いますが、患者さんにとって、ご自分だけではわからなかったご自分自身について深く理解し、どのような行動をとるべきか気付くきっかけになればと願い、お話を耳を傾け、背景にある感情に心を配っています。

患者さんに、CDEJ バッジについて聞かれた時、糖尿病の専門の資格なんですよと答えられることはとても誇りに思っています。また、患者さんとの信頼関係構築にも役立っています。

CDEJ の資格を取得して良かったと思うことは、まず、糖尿病について基礎的な知識を確認できること。加えて、いつでも最新の情報が得られるということです。

先輩CDEJに対しては、「糖尿病をもつ人に何かを提供するとはあまり思わず、逆に知ること、教えてもらうことのほうが多いです」と話しています。

一人ひとりが自分らしく生き、活躍できる多様性の時代と最近よくいわれますが、多様性を考えることが糖尿病を持つ人を考える第一歩だと思います

CDEJ 資格取得について、現在の5職種以外、もっと広い職種がCDEJの資格を持つことが出来ればいいなと思っています。



CDEJの魅力、自分の働き方



成瀬桂子
医師・司会進行

出席者

[司会] 医師…………… 成瀬桂子 (愛知学院大学歯学部教授)
看護師…………… 田中利江子 (岐阜大学医学部附属病院)
管理栄養士……… 京面ももこ ((公財) 田附興風会医学研究所北野病院)
薬剤師…………… 阿部真也 (つなぐ薬局 足立)
臨床検査技師… 清水康平 (東邦大学医療センター大森病院)
理学療法士……… 相澤郁也 (三咲内科クリニック)

はじめに

成瀬●本日は、認定機構設立 25 周年記念座談会として皆様に「CDEJ の魅力、自分の働き方」について、お話をお伺いしたと思います。私は広報を担当しています成瀬桂子です。最初に自己紹介をお願いします。

田中●看護師の田中です。CDEJ 歴は 17 年になります。現在、糖尿病内科に勤務し、病棟に働く CDEJ の支援、教育にも関わっています。

京面●管理栄養士の京面です。CDEJ 取得後 10 年ぐらい経過しています。当院の糖尿病チームおよび病棟では、なるべく若手に参加してもらい、その若手教育に関わっています。外来栄養指導やまた担当する脳卒中病棟では知識を活かして関わっています。

阿部●薬剤師の阿部です。まず病院勤務で CDEJ を取得し、その後 2 回更新。現在は保険薬局にて、糖尿病薬物療法認定薬剤師という資格も取得しています。

清水●臨床検査技師の清水です。以前は、患者さんと個々に接する機会もありましたが、現在の病院では難しく、糖尿病患者さんを見つけては積極的に声がけをしています。

相澤●理学療法士の相澤です。クリニックで働くことは恵まれており、主に ADL に障害がない方を対象に、運動療法の提供や多職種での治療支援を行っています。

CDEJ を取得してよかったこと

成瀬●ではまず、CDEJ を取得してよかった点を、ご自分の仕事を通して、お話いただければと思います。

田中●病院を超えた仲間が増えたことが一番です。他の病院で働いている CDEJ や、しかも自分と同じ職種だけではなく、いろいろな職種の方とお話し、情報交換する機会が増えました。様々な学びが深められ、資格を取ってよかったと思います。

京面●資格更新の勉強会や講習会において、1 症例を多職種でかなりの時間をかけ、じっくり意見交換することができたのはよかったです。

うちの病院ではこうやっているとか、日常の臨床よりもかなり深くいろいろな情報を共有できる場があるのが CDEJ の特徴で、すごく魅力的な資格だと思います。

阿部●CDEJ を取ってからは、糖尿病を専門としている薬剤師なのだという自覚が芽生えました。そういう自覚があったがゆえに、自分の専門性を維持するために、毎年、糖尿病学会にも行くようにもなりました。

清水●今の病院に異動してきた際、CDEJ を持っている話をするや、カンファレンスに誘っていただいたり、管理栄養士さんや薬剤師さんから、NST もあるから来ない？ というような誘いを受け、そういった輪が広がったのも非常に大きいと思いました。また、「健診で医師から糖尿病に関しこんなふうに言われた」と患者さんから相談を受けることがありますが、自分から医師の先生はこういうことを思っているというのを伝えられるようになりました。

相澤●資格を取ってから患者さんに対しての関わり方はもちろん、治療への参加、チーム内での関わり方が大きく変わったかと思います。取得後は治療支援に関わるチームの一員としての自分の役割が明確に見えるようになってきて、運動療法中に患者さんと話すにも、糖尿病の治療支援に必要な情報を引き出すことを意識して話すようになりました。

これから CDEJ を目指す方へ

成瀬●これから、ご自分と同じ職種の方で CDEJ を目指す方にどのようなアドバイスをされますか。

相澤●実際に患者さんに関わると、運動のことだけを知っていればよいわけではなく、薬や食事のことは治療支援の一環として大事な知識だと実感します。テストのための勉強ではなく、今後、自分が治療支援として関わっていく中で必要な勉強だと思い、勉強してもらいたいと思います。

清水●将来的な投資のような形で、検査技師を検査室だけではなく、患者さんの目に留まる外でも働けるようにしてもらえると、CDEJ を取りたい、ここで活躍したいと思う人がもっと増えてくるのではないかと思います。結果的には、糖尿病の患者さんを減らすことにもなり、合併症を減らすことにも



田中利江子
看護師



京面ももこ
管理栄養士



阿部真也
薬剤師



清水康平
臨床検査技師



相澤郁也
理学療法士

なると思います。

成瀬●薬剤師、管理栄養士がどんどん外に出て、病棟にも出ていく。検査技師もというところもありますよね。

京面●他疾患がメインの治療であっても糖尿病の患者さんは多く、知識の習得はとても重要であると先ずアドバイスしたいと思います。

CDEJ 取得をきっかけに、知識や経験を積み重ね、多職種との関わりを活かし活躍してもらったらと臨床で感じます。

田中●糖尿病に関し、苦手意識をもつ方も多いのですが、CDEJ を取得し学ぶことで、こうしたいいのだと思えることがたくさんあり、それらの経験を繰り返すことによる達成感があり、すごく楽しいです。また、CDEJ で学ぶことは患者さんを理解するうえで、とても重要です。他の病棟に異動しても CDEJ で学んだことは今後の看護にも絶対生きてくるし、応用できるものだと思うので、ぜひトライしてほしいと思います。

阿部●糖尿病患者さんが薬を飲めないことに対し、本人がだらしなからと片づけてしまう人が、薬剤師の中には今でも多くいるような印象です。飲めない背景が何か必ずあるので、その背景を聞けるようになれば、今の若い薬剤師には伝えるようにはしています。

成瀬●在宅医療はこれからますます中心的な医療になってくると思いますし、医師、CDEJ を含め、スティグマをなくしていく中心になっていかなくてはいけないところですね。ありがとうございました。

CDEJ であったからこそできたこと

成瀬●ところで、CDEJ であったからこそ、患者のニーズが把握できたと思うようなエピソードがありましたら、教えてください。

田中●CDEJ を取り、いろいろ学んでいくうちに、患者さんの心の準備状態とか、何がうまくいかないことにつながっているのか、考えることを大切に思うようになりました。患者さんの置かれている背景とか、患者さんが今どんなことに困っているのか、どんなことをこじらせてしまっているのか。

そういったことです。

京面●学生のときに習った糖尿病の指導は、計算や指導がメインだったように思います。CDEJ になり、ガイドブック、講習会を通し、患者さんへの関わり大切さを学びました。今は、誠意をもって、患者さんといろいろお話をしながら信頼されるようになりたいと、研さんを積んでいるところです。

阿部●CDEJ になり、糖尿病患者さんのことを考えるようになってから、傾聴する力・意識が身に付いたと思います。薬学部の教育における傾聴はテクニック論的な意味合いが強く、本当の意味での共感、患者さんの気持ちの部分を含めるような傾聴をするようになったのは、恐らく CDEJ を取ったからだと思います。

清水●CDEJ を取ったからこそ、糖尿病患者さんのいろいろな相談・ニーズに応えられるようになったと思います。例えば、患者さんに対し、担当医に連絡を取りながらブドウ糖をあげたりとか、SMBG を手持ちで持っていたので測って報告したり、そういった対応が自然にできるようになったのは、CDEJ を取ったからこそと思います。

相澤●患者さんと運動しながら食事や薬の話を聞き、他職種に情報を提供するというのもしています。患者さんから、運動の先生から食事とか薬の話を聞いてもらったなんて初めてだわ、うれしいと言われることもあります。また、他職種から身体活動について、いろいろアドバイスを求められたりすると、頼られているなど実感がわき、うれしいな、よかったなと思います。

チーム医療で CDEJ が輝く瞬間

成瀬●ありがとうございました。先生方が患者さんのためになるような傾聴する方法とか、いわゆる知識だけではなく、ペイシエント・センタードと言われるような患者さん中心の医療ができる糧にもなっていることを伺いました。

最後に改めて、多職種連携、チーム医療の中で、CDEJ になってよかった瞬間についてお話いただけますか。

田中●職種はいろいろなパワーバランスがあると思いますが、チーム医療では皆が同じ CDEJ として対等に意見を交わ



し合えるし、同じ知識を学んだ仲間として話ができるので、価値観のすり合わせに難しさはなく、患者さん支援というところでは、濃密な話し合いが最初からできる環境があると思います。

京面●私は糖尿病チームのほか、病棟でNSTをやっていたり、嚥下チームに所属していたりします。常にCDEJを意識しているわけではありませんが、この患者さんはどうしたらいいかを先生にすぐ伝えられたり、糖尿病のチームは顔見知りのメンバーなので、分からないことは看護師とか薬剤師に気軽に聞けたり。チームに所属しているからこそできることで、ありがたいと思います。

阿部●だいたいどの病院でもカンファレンスをチームでやると思いますが、そういうものを通して多職種連携とはなんぞやということを実感として学びました。その中でどの職種がどんなことを得意とするか理解できたのは、CDEJになってからです。

CDEJでなければ チームとして、一つの疾患の患者さんに対し深く考える経験はしなかったと思います。いろいろな職種の方の意見を聞き、いろいろな角度から疾患をアプローチする。それがほかの疾患をみる時にも生きてくると今は思います。

清水●CDEJを取得することにより、横のつながりができたこと。カンファレンス以外のところでも、日常の何げないルーティンの仕事の中でも、これ、何だっけというようなことを、相談できるような看護師さん、薬剤師さん、栄養士さんがいて助かっています。例えば、転倒の恐れがある患者さんの移乗の仕方を勉強会でやってくれませんかというような相談を看護師さんにもお願いもできます。糖尿病以外のところにも関係性が役立っているのを非常に感じます。

相澤●患者さんしかり、多職種の方々しかり、全員にリスペクトができるようになったのは、しっかりCDEJの勉強をし、それぞれの職種のストロングポイントを理解したからだと思います。患者さん一人にいろいろな職種、領域のスペシャリストが関わっていくことは患者さんのためになるわけで、やはり自分としてはCDEJとしての勉強があつてこそ実感できることだと思っています。

成瀬●ありがとうございました。皆さんにお伺いし、患者さ

んに対する知識はもちろんですが、心理面でもどういう関わり方をしていくべきかを、様々な機会を通し学び得られてきたと思います。他方、これからますます重要になってくる多職種連携において、CDEJもその一助になっているということでもよろしいでしょうか。ありがとうございました。

深まる実践、増える仲間、CDEJの魅力

成瀬●最後ですが、CDEJをこれから取ろうという方に、一言、メッセージをお願いします。

相澤●チームで患者さんのためになる勉強ができるのがいい点かと思うので、取得に向け頑張ってください。

清水●横のつながりができ、いろいろな情報を知ることができ、検査のアップデートとか病気を多面的に捉えることもできるようになります。明るい未来がありますという言いすぎかもしれませんが、本当に視野が広がります。

阿部●薬剤師は薬だけではないということを実感するという意味で、CDEJはすごくいい資格かと思います。もちろん薬だけで病気は治るわけではありません。特に生活習慣などが大きく関わるような病気はそうです。とはいえ薬も大事なわけで、それもまた勉強になります。

京面●臨床でもつい疎かになりがちな患者さんの心理面、患者さんを主体に考えることをCDEJの受験を通して学ぶことはないかと思います。CDEJ取得は働くうえで自分自身の力の大きな土台となるのではないかと思います。

田中●絶対に実践が深まるし、仲間が増えるし、いいことばかりだと思います。一緒に頑張れる仲間が増えるのはうれしいので、CDEJがたくさん増えることを期待しています。私も協力していけたらと思います。

成瀬●皆さま、本日は短い時間の中、大変有意義な話をどうもありがとうございました。CDEJの未来に益々明るい希望が見えてきた気がしました。

今日伺った話は、今後、委員会などでも意見をいただいきたいと思っています。

先生方の更なるご発展を祈念して、この座談会を終わりたいと思います。今日はどうもありがとうございました。

主催学会との共同企画「CDEJ シンポジウム」に参加

日本糖尿病学会年次学術集会



日本糖尿病教育・看護学会学術集会



日本医学検査学会



日本くすりと糖尿病学会学術集会



Jスキルコースで学習する CDEJ

本機構が開講する「単位の取れる e ラーニング」。コースごとの申込みで、<第2群> 1 単位を取得可能。学会・研究会等への参加が難しい方、知識やスキルのアップデートをしたい方にお勧め。

講師による収録



植木浩二郎先生 (国立国際医療研究センター)

CDEJ 受講者



表彰を受ける CDEJ



鈴木万平糖尿病国内賞

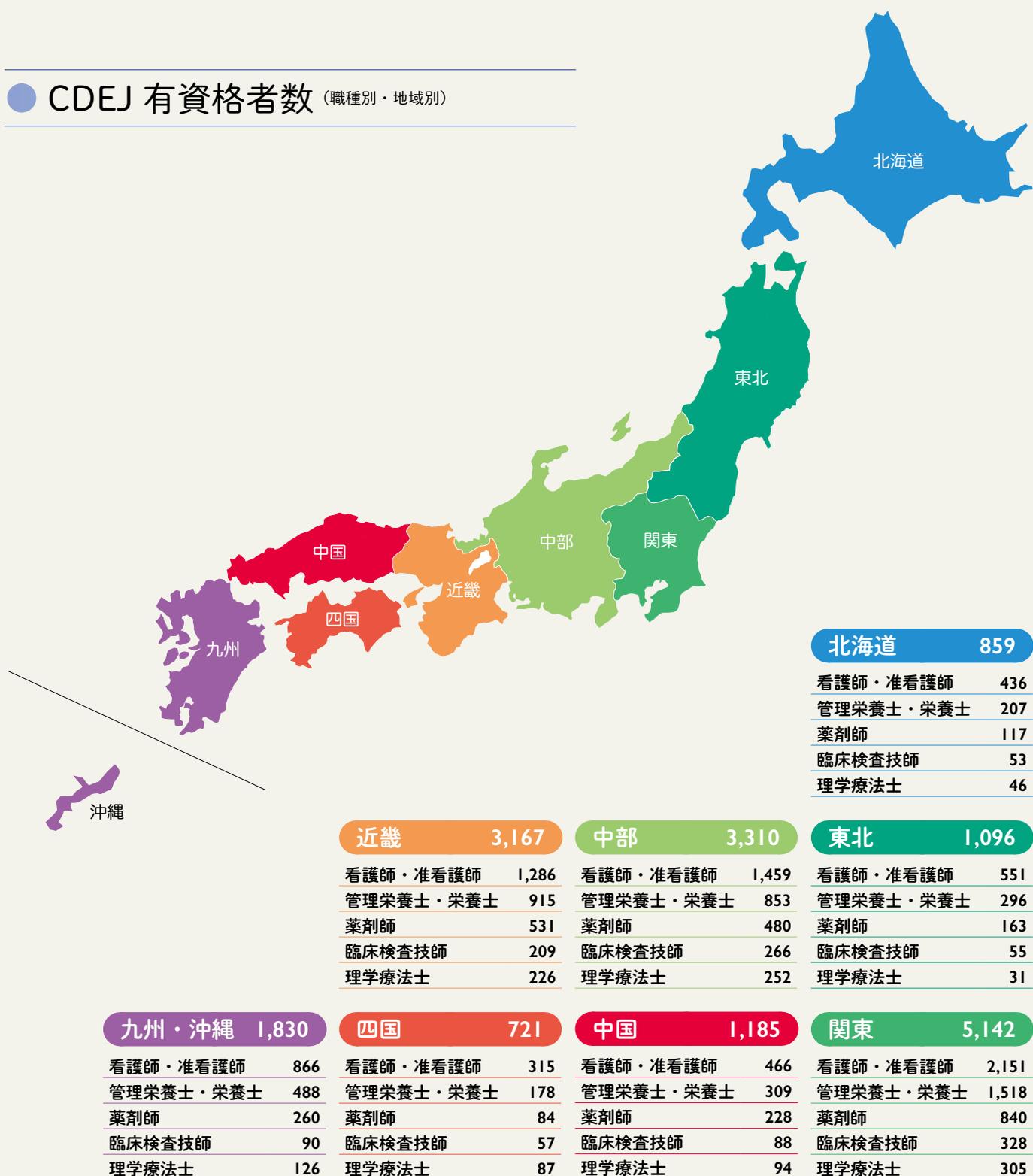
(前列中央左) 小出景子さん (永寿総合病院 / 薬剤師)
 (前列中央右) 永瀨美樹さん (佐賀大学医学部附属病院 / 看護師)



(左から) 中川裕美さん (倉敷中央病院リバーサイド / 臨床検査技師)、阿部幸子さん (奥口内科クリニック / 管理栄養士)、小林庸子さん (杏林大学医学部附属病院 / 薬剤師)

データでみる CDEJ

CDEJ 有資格者数 (職種別・地域別)



● CDEJ の職種別構成比推移

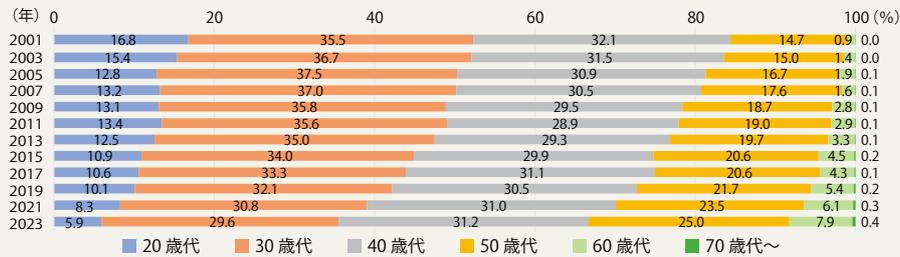
CDEJ 誕生（2001 年）から現在（2024 年）までの職種別構成比を示す。

5 職種のうち、（准）看護師が 40% 台、（管理）栄養士が 30% 前後で、この 2 職種を合わせて 70% を超える状況は当初から変わらない。2010 年頃は（准）看護師だけで全体の半数に迫っていたが、その後、他の 4 職種の方の比率が高まり、（准）看護師の比率は相対的に減少傾向。

近年は理学療法士の新規受験者／合格者の増加が著しく、2024 年度には臨床検査技師の人数を上回った。

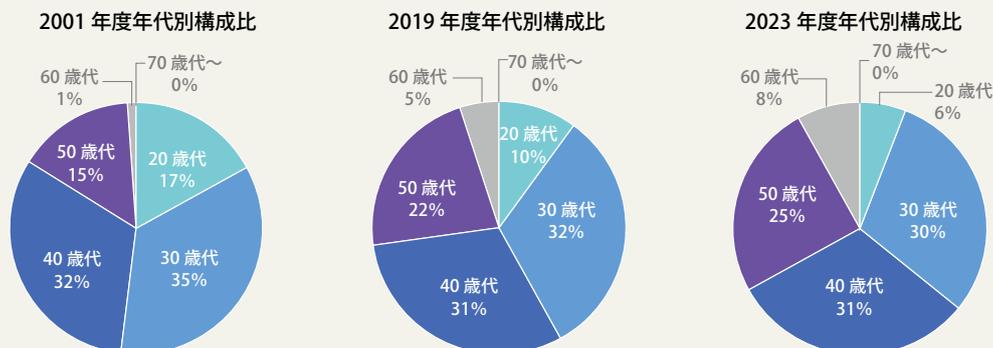


● CDEJ の年代別構成比推移 (各年 4 月 1 日現在の年齢で集計)



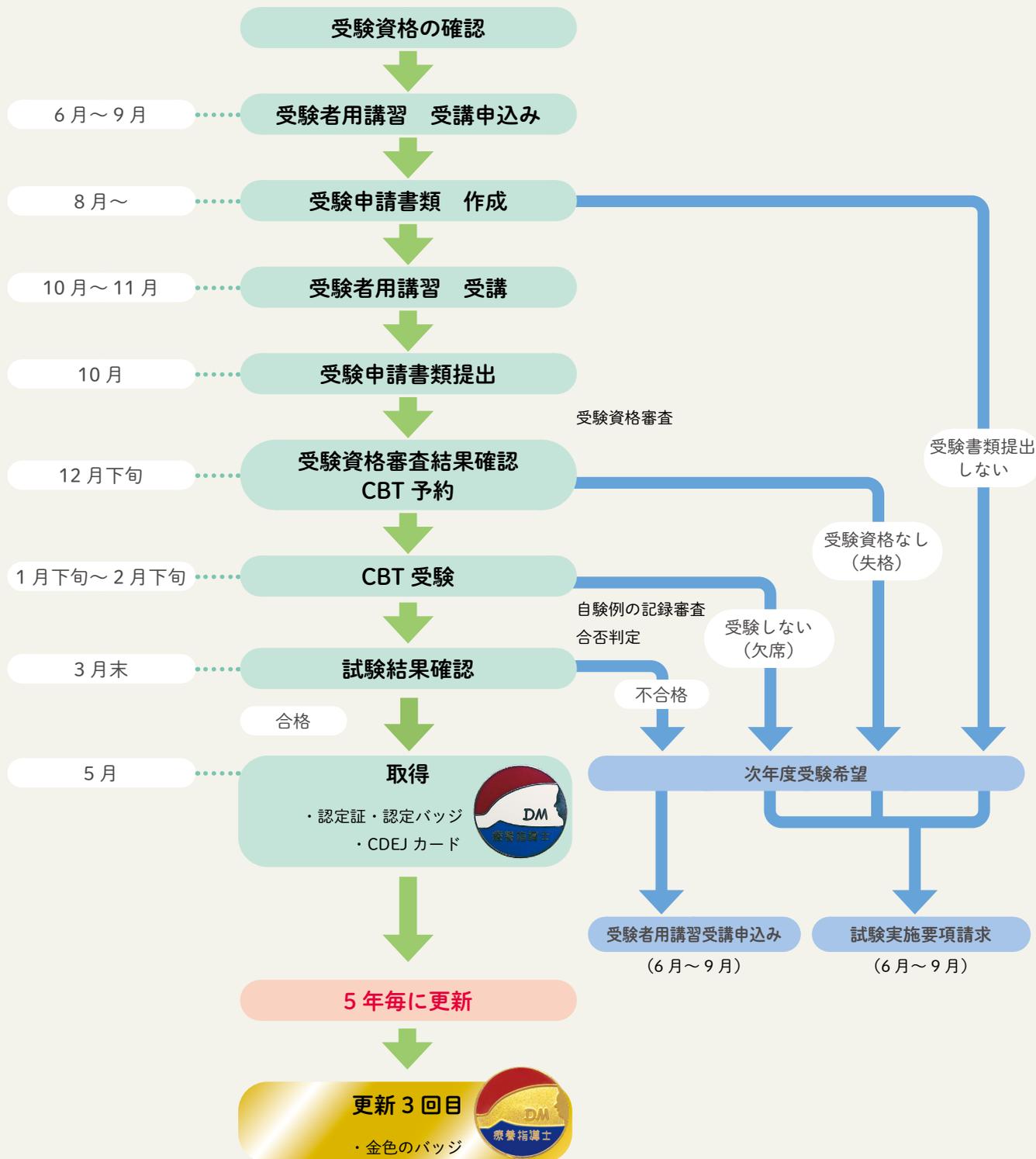
● CDEJ の年代別構成比

20 周年記念誌に引き続き 2001 年度、2019 年度と、新たに 2023 年度の年代別構成比を示す。従来同様に 30 歳代～ 40 歳代の方が多いが、比率は徐々に下がっている。2019 年度よりさらに 50 歳代以上の方の比率が上がり、20 歳代の方の比率が下がっている。



CDEJ（日本糖尿病療養指導士）になるには 資格取得の手続き

●「看護師」「管理栄養士」「薬剤師」「臨床検査技師」「理学療法士」いずれかの資格を有していることが必要です。



※ 2025年度からスケジュールが一部変更になり、上図のようになります。

一般社団法人

CDEJ(日本糖尿病療養指導士)認定機構について

Certification Board for Diabetes Educators in Japan ; CBDEJ

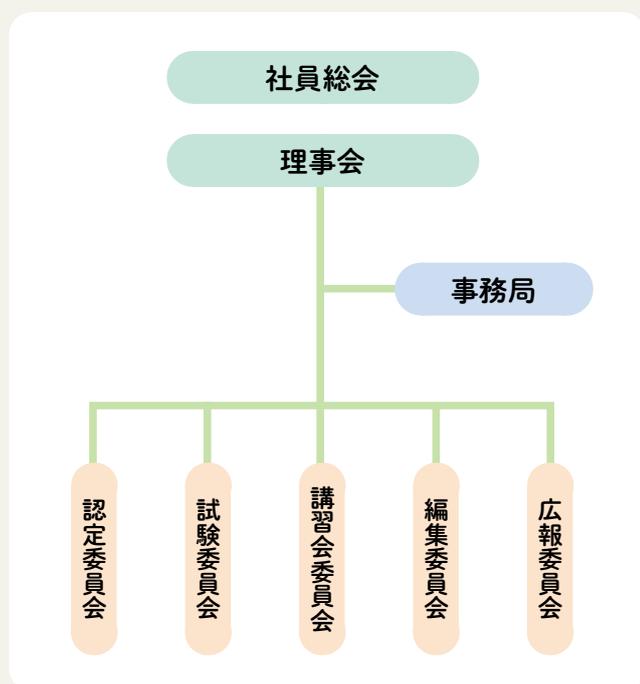
多くの糖尿病患者に対し、専門医の数は限られ、高度かつ良質な糖尿病診療の均てん化を図るためには、専門医と非専門医による「病診連携」と共に、医療スタッフ（医療法制の下で療養指導チームの一員として質の保証された）との「チーム医療」の体制作りが不可欠です。

そのため、チーム医療の体制作りの一環として、「日本糖尿病学会」「日本糖尿病教育・看護学会」「日本病態栄養学会」の3学会が協力し、2000年2月、「日本糖尿病療養指導士認定機構」が設立されました。2012年、任意団体から法人化しました（一般社団法人日本糖尿病療養指導士認定機構）。略称は「CDEJ 認定機構」です。

● 組織

社員は、「日本糖尿病学会」「日本糖尿病教育・看護学会」「日本病態栄養学会」。

役員・委員は上記3学会から選出。



● 主な事業

1. 講習会の開催

- ・「受験者用講習」(10月～11月、eラーニングで開催)
- ・「認定更新者用講習会」(11月～2月、eラーニングで開催)

2. 認定試験の実施

- ・認定試験を実施(年1回)

3. ガイドブックの発行

- ・「糖尿病療養指導ガイドブック」(毎年発行)

4. 認定証の交付

- ・認定試験に合格した方・更新を認められた方に「日本糖尿病療養指導士」の認定証を交付

5. 認定資格の審査

- ・認定試験受験資格審査、認定更新審査(認定期間の終了時に認定更新を希望する「日本糖尿病療養指導士」に対し認定更新審査を行う)、認定期間延長審査など

6. 広報活動

- ・CDEJ News Letter の発行(年4回)
- ・Webサイトの運営、パンフレットの発行、ポスターの作成など

● 受験資格と認定更新について

詳細は本機構のWebサイトをご覧ください。

<https://www.cdej.gr.jp>



機構 Web サイト



CDEJ News Letter





<https://www.cdej.gr.jp/>

未来への架け橋に CDEJ 認定機構



一般社団法人日本糖尿病療養指導士認定機構
〒113-0033 東京都文京区本郷 2-30-7
本郷 T & S ビル 3 階
TEL : 03-3815-1481 FAX : 03-3815-1487

